# 『珠洲遊記』を読む――新発見！　江戸時代の能登旅行記

於金沢大学附属図書館　二〇二六年一〇月二十八日（水）
人文学類　猪瀬千尋

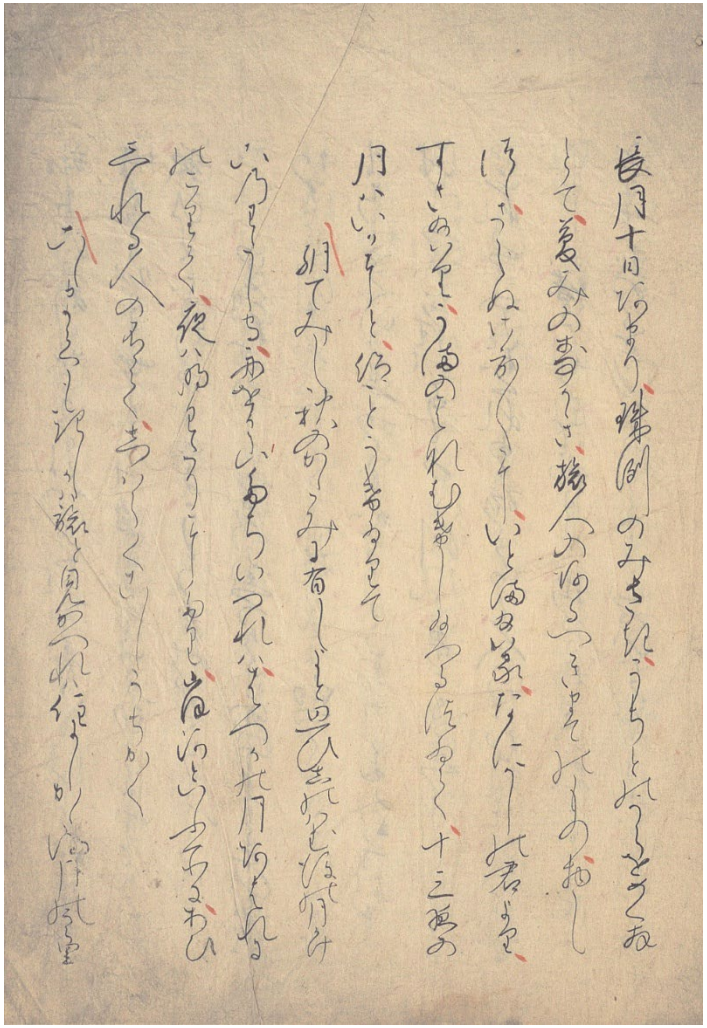
## はじめに

○金沢大学附属図書館蔵『珠洲遊記』

書誌：和綴冊子本、二四×一八糎。縹色布目地表紙の左上に題簽貼、本文と別筆で「珠洲遊記」とあり。料紙楮紙、墨付全十七丁、片葉一〇行書。扉一丁、中央に「銘曰／領畳三崎波／裾払七海雲／日亀」と墨筆、印あり「探花文庫（近弥二郎）」「西湾図書（水上一久）」。最終丁裏に付箋あり、本文と別筆で「日亀上人、加州舟岡山円乗寺僧、波吉宮門ノ碑銘ニ出ヅ」とあり。

日亀上人（にっきしょうにん）による能登の紀行文。日亀は江戸後期、日蓮宗の僧で、舟岡山円乗寺（現金沢市河原市町）住職、後に京都本満寺四十五世。浮木院と称す。文化十一年（一八一四）の熊本県八代市本成寺の日建上人像賛、同十三年の青森県黒石市法峠寺題目石、函館市実行寺題目石などにその名が残る。

旅の行程は外浦より珠洲に至り、内浦を経て七尾などに滞在、最終的には氷見を経て放生津にまだ至っている（別紙添付地図参照）が、旅程が詳細なのは、宇出津までである。



## ①　出立

長月十日あまり珠洲のみさきうちとのうらをめくる
とて夢みのすがき旅人のあるへきまでのもの物し
つゝさらぬ御方々にいとま給はるなにかしの君より
すさ給はりうまのはなむけし給へるつゐて十三夜の
月はいかにと仰ごとうけ給りて
　馴てみし秋のかたみに有しよと思ひしのばむ後の月かげ
このわたし守舟をか山たちいつれははつかの月あはれに
のこりて夜は明わたりにけり岸河といふ所にあひ
しれる人の所にてしはらくこしうちかく
　こしまえもきしかは旅と見かへれば住よしかゝる月のうら里」1オ

## ○整定本文

長月（ながつき）十日あまり、珠洲の岬、内外浦（うちとのうら）をめぐるとて、夢みのすがき、旅人のあるべきまでの物ものしつつ、さらぬ御方々にいとま賜はる。なにがしの君より、すさ賜はり、馬の餞（はなむけ）し給へるついで、「十三夜の月はいかに」と仰せごと承りて、

　馴れて見し秋のかたみにありし夜と思ひしのばむ後（のち）の月影

この渡守、舟岡山立ち出づれば、二十日の月あはれに残りて、夜は明けわたりにけり。

岸河といふ所に、相知れる人の所にて、しばらく腰うち掛く。

　こしまえもきしかば旅と見かへれば住吉かかる月の浦里

## ○現代語訳

旧暦九月十日過ぎ、珠洲の岬や内浦・外浦をめぐろうと、旅寝の支度や、旅人として必要なものをあれこれ準備し、普段から親しくしている方々にも暇乞（いとまご）いをした。ある方からは「すさ」をいただき、また旅立ちの餞別（せんべつ）をしてくださった折に、「十三夜の月はどのようであろうか」とのお言葉を承ったので、

――道中、月の光を眺めながら、これは慣れ親しんで眺めた秋の形見、あの時の月夜なのだと思って、懐かしく偲ぶことにしましょう。

さて、この「渡守」が舟を渡すように、舟岡山を立ち出ると、二十日の月が名残惜しげに空に残っていて、やがて夜はすっかり明け渡った。岸河という所で、知り合いの人の家に立ち寄り、しばらく腰を下ろした。

――以前にもここへ来たことがあったので、今こうして旅の身で振り返ってみれば、月のかかるこの浦里は、まことに住みよい所である。

## ② 妙成寺の版木

瀧谷寺は大寺なり。この御寺に桜木の経あり。もと吼木山のものにて、弘法のものせるものなり。故ありてこの所に伝ふ。およそ千歳あまりも経りぬるものから、木朽ち、文字磨滅し、巻の数も全くなし。惜しと思ふある身は、これよりも先に跡形なくなるべかめれば、「国」「妙」の一片にても摺り写し、ながらふべき所にながらへしめんと、切に乞ひ、摺り得てし。六の巻のはじめつ方なりける。

瀧谷山妙成寺は大きな寺である。この御寺には、桜の木でつくった『法華経』の版木がある。もとは吼木山（現・珠洲市）にあったもので、弘法大師が作ったものだという。いわれがあって、この寺に伝わったものである。およそ千年以上もの歳月を経ているため、木は朽ち、文字もすり減って消えかかり、すべての版木が揃っているわけではない。これを惜しいと思う私は、この経が自分より先に跡形もなくなってしまいそうなので、「国」「妙」の二文字だけでも摺り写して、後世まで残るべき所に残してやりたいと思い、切に願い出て、摺ったものを得たのである。それは第六巻の初めのあたりであった。

## ③ 富来での貝拾い

荒木の浜を心細く走りて、富木（富来）に至れば、六つの鐘なる。この所に貝多く集へり。桜貝、紅葉貝、なかにもいつくし。皆、子達のもてあそびにて、法院のものには似つかしからずと思ふもあらめど、仏の出でし国にも、貝もて宝とし、滅後、阿育大王の、卒塔婆ごとに供養し給ひしにも、貝なりければ、ただに由なきにもあらず。「我には許せ」と、拾ひそろゆる。歌心貝、薫物入れによかめる、身・蓋合ひたるを拾ひて、右左を言はず、持ちにさだめて、笈の内に入れたり。

荒木の浜を心細い思いで急いで通り抜け、富来に着くと、日の出を告げる鐘が鳴っていた。この辺りには貝がたくさん集まっている。桜貝、紅葉貝など、なかでもたいそう美しい。「どれも子供たちの玩具のようなもので、僧である私には似つかわしくない」と思う人もいるだろう。けれども、仏がお生まれになった天竺でも貝を宝物とし、仏の滅後、阿育大王が卒塔婆ごとに供養した品にも貝があったのだから、まったくいわれのないことでもない。「これぐらいは許してくれ」と、貝を拾い集めた。歌仙貝は、薫物を入れるのにちょうどよさそうな貝で、身と蓋とが合うものを拾っては、とりあえず品定めして、笈の中に入れた。

## ④ 天狗の爪

この関野の口、谷と谷とのあたるに、入りたる海あり。磯山そびへて、打ち寄せしさざれ石もところ定めず、細波にただよふ。櫓を押す男、指さして、「この一所にのみ天狗の集へり。そのしるしには、かの人の爪なんもの、ここにのみ落ちゐたり。墨染の世の

常の人にもあらねば、下りて見給へんや」と、舟さし寄す。連れの一人二人に岩根・岸根を探らしめしに、はた出で、かの人の爪なんものを拾ひ得たり。石精とは思へど、まさしく肉残れるものによく似たり。帰りての一夜語りにと、これもまた笈に入る。まことに恐ろしき所は、この鬼の爪をもてもしりぬべし。「世の常の人の拾ひ得べき物か、さすが」と言ひて、また舟漕ぐ。

この関野の入口には、谷と谷とが出合うところに、海が入り込んだ入江がある。磯山が高くそびえ、波に打ち寄せられた小石もとどまることなく、さざ波に漂っている。櫓を操る男（船頭）がそこを指さして言う。「この一か所にだけ、天狗が集まるのです。その証拠に、あの方々の爪のようなものが、ここにだけ落ちています。墨染めの衣を着た、普通の人とは違うお方なのですから、舟を下りてご覧になってはいかがですか」そう言って、舟を岸へ漕ぎ寄せた。そこで連れの一人二人に、岩の根もとや岸辺を探させたところ、さあ出てきて、天狗の爪のようなものを拾うことができた。石英だろうとは思うものの、まるで肉がまだ残っている爪のように、実によく似ている。帰ってから話の種にでもしようと、これもまた笈の中に入れた。なるほど、恐ろしい場所だということは、この鬼の爪からだけでも分かろうというものだ。船頭は、「やはり、普通の人に拾えるような物ではありませんな」と言って、また舟を漕ぎ出した。

## ⑤ 突然の下船

この前の浜より関野へ行く。船路はえも言はぬ奇絶の所にて、敷島の大和島根のものにてあらず。文月望の月に遊びし赤壁のもとは知らねど、思ふにここには二の町なるべし。かの男、また慌ただしく磯辺に漕ぎ寄せ漕ぎ寄せ言ふ、「海の面ただならず。俄かに風の変はりなん。今宵夜半には雨降るべし。剱地まで御供とこそ思ひしに、風変はらば我が住む方に舟帰るべからず。この山のうち越してぞ、剱地の里に。急がせ」と言ふ。連れたる童に果物とらす間もなく、舟漕ぎ出し、いづ地やら、帰る方を見失ふ。

この前浜から関野へ向かった。舟で行く道は、何とも言い表しようのないほどの奇勝絶景で、とても日本の景色とは思われない。蘇軾が七月十五夜の月のもとで遊んだという、かの赤壁が実際どのような所なのかは知らないが、思うに、ここに比べれば赤壁も二番手というものだろう。例の船頭が、また慌ただしく舟を磯辺へ漕ぎ寄せながら言う。「海の様子がふつうではありません。もうすぐ風向きが変わるでしょう。今夜は夜半には雨が降るはずです。剱地までお供するつもりだったのですが、風向きが変わってしまえば、私の住んでいる方へ舟を戻すことができません。この山を越えて行けば剱地の里です。お急ぎください」そう言うと、連れていた童に果物を取らせてやる暇さえなく、舟を漕ぎ出した。どちらへ行ったものやら、船頭が帰ってゆく方角も見失ってしまった。

## ⑥ 深見の夜

深見山に瀧を望めば、猿山に猿叫ぶ。まことに能妙の巴峡なり。天辺の月、いづれの処にかある。

深見山うらみの瀧に猿鳴きて涙ぞ落つる千尋百尋

宿の姥も猿に似たるを、人なれば物言ふ。深見、皆月の二村はいぶせき限りにて、かの先、国めぐりの時だにここには泊まらず。まして、此方より宿とは、えたうたう聞こえ上げず。ただ、傍らで夜を明かし給へる。樹の下、石の上のためしに、「死なば死なめ」とて、草の座を掻いてくれしは、時にとりての天の羽衣なり。

椎かや、やき栗、粟の飯、塩にせし梅の実、片蕗の節、かりそめにしつらひ、「湯浴みせよ」と言ふ。湯浴み、湯浴み、見出す沖の方、二里ばかりにと聞こゆるに、幾許の釣舟、うばたまの夜のことなれば、行方もなき沖の方は、ただ黒き幕を引き渡したるごとくにて、そのこなたにのみ、焚き競べたる七浦の篝火。尽かするほどの風なれば、波もなき水にはらはらと落つる火影、いろくづの数も数へつべく、夏ならましかば涼しと愛で聞きつむ。

かの方違への宿にせき入れし水の心は知らねど、ここにいくばくも違ふことあらじ。明けばいみじき荒磯とは、天眼通の尊者も知ろしめさじとて、押し拭ひいる。これほどに興ある宿りは、東路に五十三続く駅舎もあるべからず、と思へば、旅の宿りはいぶせきにはよらず、といふことをやうやう思ひ知る。

暁の空、いたく曇りて、山かげの紅葉は夜の錦なるに、六郎木といふ路を左に見なひて、昨日過ぎし磯山の上、松の林、蔦はふ藪、杣人の通ふ橋を渡りて、寺口といふ所に、かの猿の孫に導かれて出づ。

深見山で滝を眺めると、猿山では猿が叫んでいる。まことにここは、能登の巴峡といったところである。それならば、空の月はいったいどこにあるのだろう。

――深見山の海岸沿いの滝に猿が鳴いて、その涙は千尋、百尋もの深さへと落ちてゆく。

宿の老婆も猿に似ていたが、人間なので口はきく。深見・皆月の二村は、どこもひどく気が晴れない所で、以前、国めぐりをした時でさえ、ここには泊まらなかった。まして今回は、こちらから「宿を貸してください」などとは、とても申し上げられない。ただ、その傍らで夜を明かすことになった。石上樹下の例にならって、「死ぬなら死んでもかまわない」と覚悟していたので、おばばが草を掻き集めて寝床を作ってくれたのは、私には天人の羽衣にも等しいありがたさであった。

しめじ、焼き栗、粟の飯、梅干し、フキなどを、とりあえず食事にしつらえて、「湯浴みをなさい」と言う。湯浴しいしい外へ目をやると、沖の方、ハキロほど先であろうか、たくさんの釣舟が出ている。烏羽玉のように真っ暗な夜のことなので、果ても知れない沖の方は、ただ黒い幕を一面に引き渡したようである。その手前にだけ、競うように焚かれた七浦の篝火が見える。風も尽きてしまいそうなほどだから、波一つない水面には、篝火の光がはらはらとこぼれ落ちるように映り、魚の数まで数えられそうなほどである。これが夏であったなら、「なんと涼しげなことか」といつま

でも眺めていたことであろう。

『源氏物語』に見える、あの方違えの宿に 堰(せ)き入れてあった水が、どれほど趣深いものであったかは知らないが、ここの景色もそれとさほど違いはあるまい。夜が明ければ、実はひどい荒磯なのだということなど、天眼通を備えた尊者でさえお分かりになるまい、などと思いながら、体を拭いて寝床へ入った。これほど趣のある宿は、東海道に五十三も続く宿駅にだって、そうそうあるまい。そう思うと、旅の宿というものは、むさ苦しいかどうかで値打ちが決まるものではないのだと、ようやく分かってきた。

明け方の空はひどく曇り、山かげの紅葉は、見えないままの「夜の錦」となっている。六郎木という所へ向かう道を左手に見ながら、昨日通った磯山の上を進み、松林や蔦の這う藪を抜け、杣人が通る橋を渡って、寺口（道下）という所へ、例の猿おばばの孫に道案内されて出た。

## ⑦ 輪島のにぎわい

これより輪島へ通ふ大路にて、もの 商(あきな)ふ人、牛馬(うしうま)、柴負ふ乙女、昨夜(よべ)取りしいろくづを籠にし、物を数してうぬいきんとする男も通る。大寺焼けて、跡形なし。ただ、いまだ荒き風吹く丸山に休らひ、縄又村には立ちも寄らず。（和歌略）

輪島に至れば、鳳至の宮の祭りとて、人多く集ふ。神さびたる瑞籬(みずがき)は 尊(とほと)かめれど、むねむねしからぬ 神事(かみわざ)は、神も受けずや。我、祭りにあづからざれば、よそに見て行く。袖ヶ浦、風寒し。七島、初めて見ゆ。これより先々は、皆、塩焼く所にて、立ちのぼる煙も、秋の浦はあはれにもの悲し。

ここからは輪島へ通じる大通りで、物を商う人や牛や馬、柴を背負った娘、昨夜獲った魚を籠に入れた者、また品物を数えながら行く男なども行き交っている。大寺は焼けてしまって、跡形もない。ただ、今なお荒々しい風の吹く円山でひと休みし、縄又村には立ち寄りもしなかった。

輪島に着くと、鳳至の宮の祭りだというので、大勢の人が集まっている。古びて神々しい瑞籬は尊く見えるけれども、さほど重々しくもない神事では、神もお受けにならないのではあるまいか。私はこの祭りには関わりのない者なので、よそながら眺めて通り過ぎた。袖ヶ浦は風が寒い。ここで初めて七島が見えた。この先はどこも塩を焼く所で、そこから立ちのぼる煙も、秋の浦ではしみじみと物悲しく見える。

## ⑧ 片岩村の老爺

今日の日も暮れぬ。片岩村の 長(おさ)に問ふて、宿借る。この家に八十九になる禅師の、老の病なぐさめ、打ち寄りて育む。爐をいだき、帽子(もうず)着てをれり。長生きのわづらはしきを侘ぶ口先までも、いとけなき人になり。門(かど)を見てめづらしがる。

やがて家の娘とやうにて、八(やっ)、九(ここのち)ばかりなるが連れ立ちき。くまもなく老禅の膝にいざり寄り、「あが師なに、いまはむかしをかたりくらべ」と、まつはり責むるは、いつもい

つもの事のやうなり。田舎人のありのままに何の気もなく無為なると、この老法師の無我なるとに、われ、我を忘れて、「いで我、昔語り聞かせん」と言へば、打ちかたけて、まづ「昔々、尉と姥と有りけり」と言へば、「そは古めかし」とて、皆逃げて入る。

今日の日も暮れた。片岩の村長を尋ねて、宿を借りる。この家には八十九歳になる禅師がおり、年取って不自由なのを、家の者たちが寄り添っていたわり養っている。禅師はいろりの傍で、頭巾をかぶって座っていた。長生きのわずらわしさを嘆くその物言いまで、すっかり幼い子供のようになっていて、屋敷の内の様子を眺めてはめずらしがっている。

すると、この家の娘らしく、八、九歳ほどの子がやって来た。何の遠慮もなく老禅師の膝もとへいざり寄って、「おじいさま、ねえ、むかしばなしをして」と、まとわりついてせがむ様子は、いつものことらしい。

田舎の人々が、ありのままで何の作為もないことと、この老法師が我執を離れて無我であることに接しているうち、私まで我を忘れてしまい、「さあ、それなら私が昔話を聞かせてやろう」と言った。そこでみな身構えて聞こうとするので、まず「昔々、尉と姥がおりました」と始めたところ、「それは古くさい」と言って、みんな逃げて部屋の中へ帰ってしまった。

## ⑨ 川浦海岸で石ひろい

昔、家を出でてよりこのかた、今にまで尋ぬるものは仏。このたび、庵出でしより今日にまで石を尋ぬれども、ただ碌々たるものばかりにて、摘む菜とすればにてはあれど、再びめぐらぬことは片岩の里と、次々、浦々、懲りず探し、河村といふに寄りて、緑に光る石の星象を備へたる、大きさ、まつかれたる鳥の子のごとくなるを、真砂の中に見つく。また、おのづから硯のやうをなす池の石あるを、波の寄る所に得たり。この二石、世に多くはありがたかるべし。

天の物を盗む罪は、天の与ふ罪にて、海神の許し給ふなり。人いかに止むれど、垂れ髪に腰打ち囲めて物持てる形、檜垣の嫗に似たるしもあり、絵に描ける千鳥に似たるもありて、取り上ぐるもの多かめれど、あればあるのすさみに重くて、持て帰るに堪へず。かの浦に拾ひしは此の浦にて捨て、この浦の浜の真砂のいつくしきを拾ひ上げては、拾ひ人の捨てて行くこそをかしかりけれ。

昔、家を出て（出家して）、今にいたるまで私が尋ね求めてきたものは仏である。ところが今度の旅では、庵を出てから今日までずっと石を尋ね歩いている。しかし、見つかるのは何の変哲もない石ばかりで、摘み草でもするように拾ってはいるものの、二度と同じ所を巡ることもない旅であるから、片岩の里をあとにしても、浦々を懲りずに探し歩き、川浦海岸という所に立ち寄った。そこで、緑色に光り、星座のような模様を備えた石で、大きさは「まつかれた」鳥の卵ほどのものを、砂の中に見つけた。また、自然に硯のような形をしたくぼみのある石を、波の打ち寄せる所で手に入れた。この二つの石は、世間にもそう多くはない珍しいものだろう。

浜の石を拾って持ち去るのは、天のものを盗む罪には違いない。けれども、それも天がそうさせ

たこと、海神もきっとお許しくださるであろう。人がいくら止めても、髪を垂らして腰を曲げ、物を手に持った姿のような、檜垣の媼に似ているものもあれば、絵に描いた千鳥に似ているものもあって、ついつい拾い上げる石は多い。しかし、あるとなればあるだけ面白がって拾ってしまい、重くなって、とても持って帰れない。そこで、あちらの浦で拾った石はこの浦で捨て、この浦の浜の砂石が美しいと思えばまた拾い上げる。そうして拾った本人が、またそれを捨てながら旅をしてゆく。そのさまが、なんともおかしいのであった。

## ⑩ 珠洲にて

狼煙（のろし）は外の尾、寺家（じけ）は内の果て、山伏はその境に、高き山の名にて、神のおはしますとかや。昔より斧・まさかりの入らぬ林なれば、蔦はふ松、苔むす杉、おのが手に指したる木は、おのづから朽ちただれて、道もなきまで下草茂り、昼もなほ、ぞと寒き風吹く。越後の崎、佐渡の崎、この能登の崎に相向かひて、鼎（かなえ）の足したるを三崎とや言ふ。また、神のます所を崇め、珠洲の御前（みさき）と畏み呼ぶ名なるべきか。二所の社なる村に、神さび跡垂れ給へども、おのが知らぬことなれば、これは放（はふ）らかしぬ。

狼煙は外浦の端、寺家は内浦の果てにあり、山伏はその中間にある高い山の名で、そこには神がお鎮まりになっているという。昔から斧やまさかりを入れることのない林なので、蔦の這う松、苔むした杉が生い茂り、〔己が手に指したる〕木々は自然のままに朽ち崩れて、道も見えないほど下草が茂り、昼でさえなお、ぞっとするような冷たい風が吹いている。

越後の岬、佐渡の岬、そしてこの能登の岬とが向かい合って、鼎の三本の脚のようになっているので、「三崎」というのであろうか。また、神のおいでになる所を崇めて、「珠洲の御前」と畏れ敬って呼ぶようになった名なのであろうか。二つの社のある村には、権現がおられるけれども、私にはよく分からないことなので、ここには寄らなかった。

## ⑪ 人知らぬ九十九湾

九十九潟（つくもがた）にて

くどきても眺め尽くもの語りなき 島山（しまやま）外山（そとやま）紅葉しぐれて

みな人のゆかしうるは、松島、象潟（きさかた）にて、これかれ歌人の歌多かめれば、誰も誰も風景の親と思へど、この九十九を子ほどにも思ひ取る歌のなきは、北の国の奥まりにて、都（みやこ）辺りの人に遠き山水なればぞ。たまさか海渡る帆影、舟の入り来るのみなれば、風より外に知る人はなし。艶（えん）にをかしく生（お）ひ出（い）でし人、葎（むぐら）の宿に閉ぢ込められしは、この九十九のことにてや有りけん。

蓬莱鶴島（ほうらいつるしま）に、峰草落（みねくさおとし）、一の瀬、かまか江など、百に一つを残せし入間、一片（ひとひら）の塵も据ゑず。二百尋の底を清めて、鏡のごとき水に映るは、岸の額（ひたい）に枝垂れし姫松、松が根の光にこごふる青海波、木の葉浮かぶる海士（あま）の釣舟、渚に焼く塩竈の煙、磯山高く、切り出で

跡の石壁。雲によく人、風に乗る人、千歳を延ぶる山人にあらずは、この境には入り立つまじければ、人の知らぬは知るの親にて、かの親の親と言ひ知らさまほしけれど、己がごとき ものの言ふは、言はぬ昔にまさることなし。

九十九湾にて

――蓬莱島の山の、あたりの里山も紅葉に時雨れていて、いくら言葉を重ねても眺め尽くすことができない。

世の人々が見たいと憧れるのは松島や象潟で、あれこれ歌人たちの詠んだ歌も多いものだから、誰もがそれらを景勝地の「親」だと思っている。けれども、この九十九湾をその子ほどの景色にさえ取り上げた歌がないのは、ここが北国のさらに奥まった所にあって、都辺りの人々から遠く隔たった自然の風景だからなのであろう。たまたま海を渡る帆影や、舟が入ってくるばかりで、風のほかにはこの景色を知る者もいない。優美に美しく生まれついた人が、律の生い茂る荒れ家に閉じ込められているというのは、まさにこの九十九湾のことではなかろうか。蓬莱鶴島、峰草落、市之瀬、「かまか江」など、百に一つ足りない九十九もの入り江には、一片の塵さえ浮かんでいない。二百尋もの深い底まで清らかに澄みわたり、鏡のような水面に映っているのは、断崖から枝を垂らす姫松、松の根もとで光を受けて凝り固まったような青い波、木の葉のように浮かぶ漁師の釣舟、渚で塩を焼く塩竈の煙、そして高くそびえる磯山と、切り出した跡のような石壁である。

雲〔を自在に操る〕人、風に乗る人、千年の寿命を保つ仙人でもなければ、このような場所には足を踏み入れることもあるまい。「知らない」ということは「知る」ことの親なのであって、松島や象潟が景勝地の「親」だというのなら、この九十九湾こそ、その「親の親」なのだと世の人々に知らせたいところではある。けれども、私ごとき者があれこれ言い立てたところで、誰にも語られず、知られずにいた昔以上になることはない。